

症例報告

肺結核の経過中みられた気管支の炎症性ポリープの1例

市木 拓・穴戸 道弘

愛媛県立新居浜病院内科

受付 平成7年4月12日

受理 平成7年6月5日

A CASE OF INFLAMMATORY BRONCHIAL POLYP UNDER
TREATMENT OF TUBERCULOSISHiraku ICHIKI^{*}, Michihiro SHISHIDO

(Received 14 April 1995/Accepted 5 June 1995)

A 76-year-old man was admitted to our hospital because of pulmonary tuberculosis. He was treated by antituberculosis drugs. Four months later, bronchoscopic examination revealed three polypoid tumors. One of them was a small polypoid lesion with the pus containing acid-fast bacilli. The others were smooth surfaced black polypoid tumors without pus. Although biopsy specimens from these tumors showed a non-specific inflammatory change, the former could be considered as a tuberculous change. Four months later, the polypoid tumors disappeared and anthracosis was found at the site of black polypoid tumors. It is suggested that a polypoid tumor with tuberculous findings was in the earlier stage than the other tumors during the healing process of bronchial tuberculosis.

Key words : Bronchial tuberculosis, Inflammatory bronchial polyp, Anthracosis

キーワード : 気管支結核, 炎症性気管支ポリープ, 炭粉沈着

はじめに

炎症性気管支ポリープの原因の一つに特異的感染によるものがあり, 結核の治療中発生した炎症性気管支ポリープの報告も幾つかみられる。またその頻度も決して稀なものではないことも知られつつある。私たちが結核の治療中に3個のポリープ状病変を認めた症例を経験したので報告する。

症 例

症 例 : 76歳, 男性。

主 訴 : 発熱, 咳。

既往歴 : 1964年胆石症で手術, 1966年胃潰瘍で手術を受ける。

家族歴 : 特記事項なし。

職業歴 : 20歳から22歳の間, 鉱山で作業。22歳から55歳の間, 化学工場でガスを扱う。その際, パイプの修理で石綿を毎日のように使用していた。

* From the Department of Internal Medicine, Ehime Prefectural Niihama Hospital, 3-1-1 Hongo, Niihama, Ehime 792 Japan.

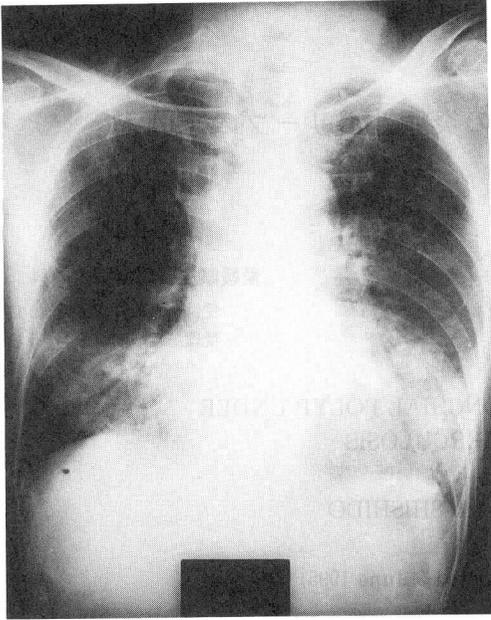


図1 入院時胸部X線写真

現病歴：1992年9月初めから、発熱と咳があり、9月4日近医へ肺炎として入院した。抗生物質等の投与を受けていたが、改善なく、9月21日の気管支肺泡洗浄液の培養で抗酸菌が検出されたため、肺結核疑いで1992年10月29日、当院へ紹介され入院した。なお、この時には気管支結核の所見には気づかれていない。

入院時現症：身長163 cm、体重39 kgと栄養状態不

良で、中心静脈栄養を受けていた。両側下肺野に fine crackles を聴取した。心音は異常なく、腹部には胃潰瘍、胆石症の手術痕を認めた。表在リンパ節は触知しなかった。チアノーゼ、ばち状指はなかった。

入院時検査成績：赤沈1時間値22 mm、CRP 2.2 mg/dl と軽度の炎症所見を認めた。喀痰検査で抗酸菌塗抹は陰性で、培養8週で結核菌を20コロニー検出した。

入院時胸部X線写真(図1)：両側下肺野を中心として浸潤影が広がっており、肺結核の病巣と考えられた。また、胸膜の横隔膜面に石灰化を認めた。

入院後経過：INH、RFP、SM を用いて結核治療を開始した。症状は軽快し、胸部X線写真上も改善がみられたが、1993年2月の胸部X線写真では左下肺野外側に結節様陰影が認められたため、悪性疾患の合併を否定するために同年2月17日気管支鏡検査を施行した。

右主気管支の後内側に、わずかに凹凸のあるポリープ状病変を認め(図2-a)、荒井分類では4a 結節隆起状肉芽型に相当するものと思われた。表面は肉眼的には正常気管支粘膜に覆われているようであった。さらにその末梢側、中間幹には、内側より隆起する黒色の表面平滑で光沢のあるポリープを2個認めた(図2-b)。これらの病変の周囲に潰瘍性病変等ではなかった。

右主気管支のポリープ状病変を生検したところ、白色、膿性の液が内部から出てきたのでブラシで擦過し、抗酸菌G2号を検出した。組織学的には(図3-a)、マクロファージの集合、好中球の浸潤があり、肉芽形成の所見がみられた。結核の組織像は得られなかったが、抗酸菌を検出したことから、結核の治癒過程に発生した炎症性

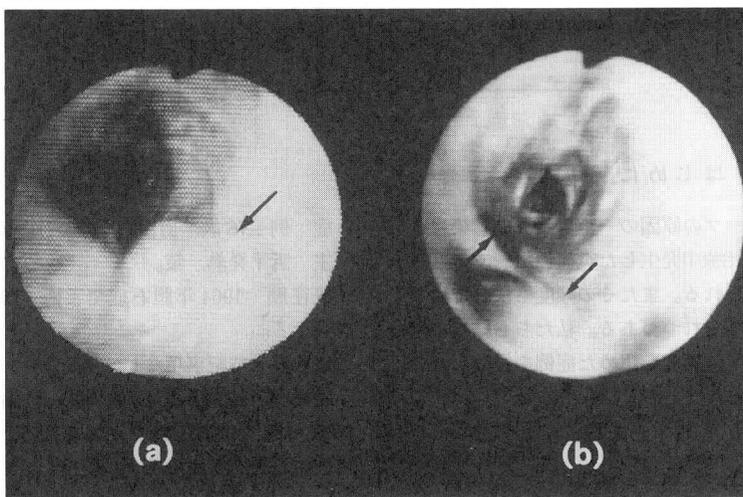


図2 気管支鏡所見

(a) 右主気管支のポリープ状腫瘤 (b) 右中間幹と下葉枝の黒色調ポリープ

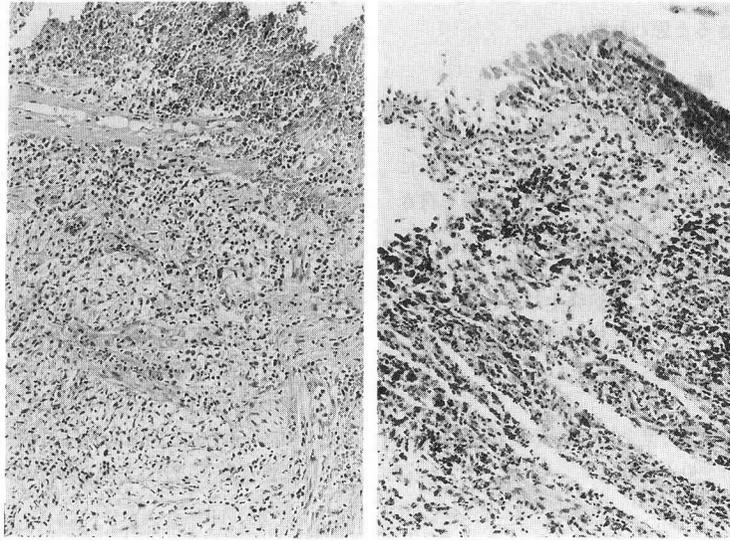


図3 組織学的所見

(a) 右主気管支のポリープ組織 (b) 黒色調ポリープ組織

気管支ポリープと考えられた。一方、中間幹の黒色ポリープの組織像では(図3-b)、上皮下間質には炭粉と思われる沈着物があり、リンパ球、形質細胞、好中球浸潤など強い炎症所見もみられたが、結核の所見はなかった。気管支内の他の部位にも炭粉沈着がみられたことから、炭粉沈着の部位に発生した炎症性気管支ポリープと考えられた。

気管支鏡検査のきっかけとなった左下肺野の結節様陰影は、病巣をブラシで擦過したところ抗酸菌G2号を検出し、治療継続により同陰影は消失したので、結核性病変の一部と考えてよいと思われた。

その後の経過は良好で、6月10日に気管支病変の経過を見るために、再度気管支鏡検査を施行したが、ポリープがあった部位のうち右主気管支の後内側部は痕跡もなく、末梢側の中間幹の黒色ポリープ部位は表面平滑で陥凹もなく、炭粉沈着がみられるのみであった。

考 察

結核の経過中にみられる気管支のポリープ状病変は気管支の結核性病変の治癒過程の所見の一つ(肉芽型)としてとらえられており¹⁾²⁾、組織学的には結核性肉芽腫とされている³⁾。一方、近年になって肺・気管支結核患者における気管支の非特異的炎症性ポリープ症例の報告^{4)~6)}が増加してきている。これらの非特異的炎症性ポリープも気管支結核の潰瘍性病変の治癒過程における再生機構の関与が考えられており⁴⁾、結核性ポリープと同様の機序により発生するものと思われる。

本症例のポリープは、いずれも組織学的には結核結節はみられなかったが、右主気管支のポリープからは、生検時に抗酸菌を含む膿がでてきており、非特異的炎症性ポリープというよりは、まだ結核の所見を残す炎症性ポリープと考えられた。一方、他の2個は表面平滑な黒色調のポリープで、結核の所見を認めず、非特異的炎症性ポリープといわざるを得ない。これらは形態的には異なった病変であるが、1人の症例でこれらの病変がみられたということは、両者は基本的には同一のものと考えられる。

このようなポリープ状の病変が結核性病変の治癒過程にみられる所見とするならば、さまざまな治癒段階のものがあるといはずで、結核の所見のないものは一層修復の進んだ段階の病変と考えられる。したがって、最近報告のみられる非特異的炎症性ポリープも、結核性ポリープも特に区別して考える必要はないように思われる。

なお、これまでに、黒色調のポリープの報告例はなく、そのため悪性黒色腫なども考慮に入れて生検をしたが、悪性の所見はなかった。組織学的には炭粉沈着があることから、炭粉沈着のある部位に炎症性ポリープが発生したものと考えられ、稀な気管支鏡所見と考えられた。

また、気管支結核の所見のうち、リンパ節穿孔型では、穿孔したリンパ節の瓦解による炭粉沈着がみられることがあるが、本症例のポリープの表面はきわめてなめらかで、乳頭状腫瘤や治癒後の陥凹所見などリンパ節穿孔型に一般にみられる所見¹⁾がないこと、胸部CTではリンパ節腫大がみられなかったこと、また他の気管支内にも

炭粉沈着の所見が広くみられていたことなどから、リンパ節穿孔型は否定できると思われた。

結 語

肺結核の治癒過程において3個、2種類の気管支のポリープ状病変を認めた。抗酸菌を含む膿を有する表面に少し凹凸のある結節状肉芽型を呈する病変と、膿を有さない表面平滑な非特異的炎症性ポリープであった。この2つは気管支結核の治癒過程の異なった段階にあるものと思われた。炭粉沈着の部位に偶然発生したと思われるポリープは、黒色調をしており、稀な所見であった。

文 献

- 1) 倉澤卓也, 久保嘉朗, 久世文幸: 気管・気管支結核. 呼吸. 1991; 10: 290-295.
- 2) 荒井他嘉司, 中野 昭, 田島 洋: 気管支結核の内視鏡所見分類について. 結核. 1989; 64: 234.
- 3) 荒井他嘉司, 中野 昭, 鈴木俊光, 他: 気管支結核の内視鏡所見と組織所見との対比. 気管支学. 1981; 3: 401-406.
- 4) 広瀬清人, 岡三喜男, 木下明敏, 他: 気管支結核の治癒過程に発生した非特異的炎症性ポリープの1例—気管支鏡による経時的観察—. 気管支学. 1991; 13: 50-54.
- 5) 前田光一, 徳山 猛, 長 澄人, 他: 気管支・肺結核治療経過中に出現した気管・気管支炎症性ポリープの3例. 気管支学. 1994; 16: 316.
- 6) 袖山信幸, 三上正志, 中村清一, 他: 結核化学療法中に一過性に出現した炎症性気管支ポリープの1例. 気管支学. 1991; 13: 620-625.